

『鬼平犯科帳』にみる統率 (歴史小説の効用)

白石 博司 陸自66

はじめに

ある人の勧めにより、池波正太郎作の『鬼平犯科帳』を読み始めた。これは歴史小説、しかも時代小説に近い分野の小説である。

この『鬼平犯科帳』は、盗賊と闘うという修羅場の中での火付盗賊改方長官・長谷川平蔵の統率が色濃く出ている。

統率については、人間の資質・心の問題に触れることが多く、我々は常日頃の左右・上下関係によって感化され、体得するか、あるいは先達の統率を積極的に書物等で学ぶ方法が一般的である。我々の職務上、通常は戦史書の中にそれを求めることが多いが、歴史小説の中にも自分の視点を定めて求めれば座右の書となり得るものもある。

一般に時代小説のヒーロー(机童之介、鞍馬天狗、拝一刀、眠狂四郎、木枯し紋次郎等)は剣に強い英雄であり、しかも大半が一匹狼である。

しかし、『鬼平犯科帳』の中の長谷川平蔵は、組織の長であり、組織を活用しての活動をテーマにしたものである。与力・同心や密偵の使い方にして

も、平蔵は非常に巧い。組織の長としての人心管理術は、現代の我々の職務にも十分に共通するものがある。平蔵と部下の信頼関係というのは、常に羨ましく思うところであるが、同時に部下に対する平蔵の心遣いも、大いに学ぶべきところがある。

小説以外に文末の参考書籍にあるように、実に多くの関連書籍がでている。これは、この長谷川平蔵の統率に魅了された結果の出版であり、実に多くのファンが何度もくり返し読み返していると述べている。

その一部を紹介するので、興味のある方は一度目を通してみて欲しい。

1 長谷川平蔵の人物像

主人公の火付盗賊改方長官、「鬼の平蔵・鬼平」こと長谷川平蔵宣以は実在の人物である。火付盗賊改方は文字どおり、放火や盗賊犯を捕らえるための幕府の役職である。江戸も中期に入ると、社会状況も変化し、犯罪も増え、広域犯罪も発生するようになり、町奉行にない機動性を備えた、特別警察として火付盗賊改方が設けられ、御先手組の中から1組を選んで任命した。戦時体制における警察の含みが込められていたむきがあり、果敢な探索・逮捕・処置が許されていた。

平蔵は、幼名を鍊三郎、四百石の旗

本宜雄と下女お園との間に生まれた「妾腹の子」であり、義母にいじめられ、その反抗もあって屋敷に寄り付かず、本所深川界隈を根拠にして放蕩無頼の青春時代を送る。

父の死後、跡式相続を許され、小普請入りの後に逐次昇進し、天明6年(1768)に御先手弓頭となり、その翌年の9月19日、42歳で火付盗賊改方の加役を命ぜられている。この時期は、天明の大飢饉の時期で、江戸でも米価や諸物価が高騰し、市中の諸方で打ち毀しが激発し、江戸に流入する難民も多く、暴徒化し米屋や富商を襲うものもあつた。その鎮庄のため、火付盗賊改方にも出動命令が出され、加役としての平蔵も与力、同心とともに働いている。天明8年10月、本役として火付盗賊改方に任ぜられ、部下として与力10騎、同心30人が配され、通算約8年もこの役目を遂行している。

町奉行は犯人を捕まえるより犯罪の未然防止が建前だが、火付盗賊改方はあくまで犯人を追跡し、身を挺して悪と闘うのが建前である。

長谷川平蔵は長官として打って付けの人物だった。厳しさと優しさをあわせ持ち、若いころ無頼の生活に通じて、市中の人間の強さと弱さ、人情の機微にも精通していただけに、部下の統率にもすぐれ、多くの密偵たちからも慕

われる。しかし卑劣・非道の賊に対しては容赦せず、厳しく追及し、拷問も辞さなかつた。平蔵の性格は剛胆で決断力に富み、悪の追及にかけては厳しいが、緻密なところがあり、いたわり の情も深い。

「人間というやつ、遊びながらはたらく生きものさ。善事をおこないつつ、知らぬうちに悪事をやつてのける。悪事をはたらきつつ、知らず識らず善事をたのしむ。これが人間だわさ」というのが、平蔵の人間観である。

2 統率者としての長谷川平蔵の魅力

(1) 職務に対する信念(使命感の堅持)

「われら火付盗賊改方は、無宿無頼の輩を相手に、めんどうな手続きなしで刑事にはたらく荒々しいお役目。いわば軍政の名残をとどめおるが特徴でござる。ゆえに、そのたてまえをもつて此度の事件を処理いたしたし。もしも、それがいかぬと申されるなら……」と自分の職務の特質を良く理解し、速断即決で事件をてきぱきと処理している。そして、「俺の仕様がいかぬとあれば、どうなとしたらよい。お上が、俺のすることを失敗と断じて腹を切れというなら、いつでも切ろう。世の中の仕組みが、俺に荒っぽい仕事をさせぬようになれば、いつでも引き下がるう。だが、いまのところ、一の悪のた

めに十の善が滅びることは見逃せぬ。むかしの俺がことをいいたてるといのか……あは、はは……ばかも休み休みのか……え。悪を知らぬものが悪を取り締まれるか」「……俺のかわりが誰につとまるうか」と、事もなげに自分以外にこの職務を遂行する者がいないことに誇りを持ち、しつかりした職務意識を確立している。

そして、善悪の区別ではなく、本格の盗賊と畜生働きの(殺生や強姦を伴う盗み)との間に一線を画しており、①盗まれて難儀をするものには手を出さぬこと。②盗みをするとき、人を殺傷せぬこと。③女を手ごめにせぬこと。と、あくまでもこの三カ条を守って盗みの芸を活かそうという盗賊に対しては、平蔵も「無理をしままでお縄にかけようとは思わぬ」と公言し、これらのモラルが平蔵の行動の中心にどっかり存在し、それがすべてに徹底しているところに、配下一同、自信をもつて行動

できる根本があるのである。

(2) 統率者としての力量

綿密な情報収集努力と柔軟な運用「こもかくも、鬼の平蔵というなあ、恐ろしい男よ。どこにどんな網が張りめぐらされているか、知れたものじゃあねえ」と恐れられているように、多くの密偵を縦横に張り巡らすとともに与力・同心、そして自らも各種変装を

して諸所を見廻り、犯罪のにおいを直感している。

また、これという犯罪・盗賊に眼を付けたなら、徹底してその人脈を調べ上げるとともに、見張り所・尾行による間断のない徴候の収集等、逮捕・捕物のために必要かつ十分な情報を収集する。

また、集めた情報資料の全てを組織を使って迅速に報告させ、更に補完の処置を指示し、時宜に合致した情報の収集に努力している。

そして、捜査に必要と思う金をけちるようなまねは決してしない。たとえ仲の悪い町奉行所配下の岡つ引であるうと、働いてくれた者には、ほんとう、何両もの金をくれてやる。まことに気が良い。

また、見落せないのは、情報に対する平蔵の勤ばたらき(直感・情報センス)である。密偵の持つてくるどんなささいな情報でも、平蔵が「なんでもよい、申してみよ」と温かく受入れられる場面が良く出てくるが、このような平蔵の態度が密偵たちのはたらきを支え、情報網をより価値あるものにして

いるのである。とかく硬直しがちな組織の中で、常にトップに情報を集中し、的確な判断で状況に即応している。そして、その情報を提供し、平蔵を支えているのは

若いころの放蕩仲間であり、彼を慕ってきた密偵たちである。先述したように彼は若いころ放蕩無頼の青春を送ったわけであるが、彼の場合、人生の中の無駄でマイナスと思われるような部分までが仕事の中に生かされているのである。

イ 人材登用の妙

筆頭与力の佐嶋忠介は、本来は平蔵の前任者である堀帯刀の与力であったが、その実力を見込み、乞うてトレドする。彼は、『鬼平犯科帳』の愛読者である元出雲市長・岩國哲人氏もその存在価値を認めるように、常に平蔵の傍にあつてその老巧な腕をふるい、よき相談相手ともなっている。平蔵の場合、佐嶋がいるからこそ、たった一人で見回りに出かけたり、一人で敵に立ち向かつてみたり、時には地方にまで盗賊を召し取りに向かったり、あるいは部下を総動員して盗賊どもを捕らえたりといった自由な判断ができるのである。佐嶋のような人間がいなかったら、まず平蔵は一人で行動するような勝手は許されない。『鬼平犯科帳』

の中の生き生きした平蔵の個性が出てくるのは、そうさせてやれるだけの控の役、受け身の役をしている内部統括者がいるからである。

また、相模の彦十、小房の糸八、大

滝の五郎蔵、おまさ、伊三次等の多くの密偵は、以前は盗賊であつたものを人柄・能力を見込んで改心させ、手足として縦横に運用しているのである。盗賊から狗と蔑まれ、命を狙われかねない彼等の必死の働きがあつてこそ、平蔵の活躍が成り立つており、これら人材の実力を見抜き、味方につけ、事件の特性に応じた適材適所に配置して運用できるこそが平蔵の力量なのである。

ウ 人材育成への努力

同心・木村忠吾、当初24歳の独身、女好きで、遊所に精通、甘辛ともに際限なしの名うての食いしん坊でもあるが、いかにも頼りなげで煮えきらない感じで、上司達に「とてもあいつは使

い物にならん」と決めつけられていた。しかし平蔵は、「……人それぞれなのだから……」と、かばい、徹底した厳しい指導と適材適所の運用により、巻を追う毎に成長が見えてくる。同心に対する厳しい指導の大半は、この忠吾に対する直接指導として表現されている場面が多い。

のちに「でかした、でかしたぞ忠吾、お前が大した役者になつてくれたのを、おりや、喜んでいるのじゃ。いまのお前は、以前の生っ白い鬼ではなくなつた」「忠吾、お前も妻を迎え子を

もうけて、顔つきが以前と大分に違つてきた」等言われるほど、同心としての実力を付けてくる。

同様に、平蔵の嫡男・長谷川辰造に對しても、たまには「……せがれめ、けじめをつけて遊んでいるらしい……若いうちだ、それもよからう」と見逃し、剣術についても、稽古をさばることが多く、「親のひいき目に見ても、きやつめには剣術の筋はない」と思われていたが、要所では厳しく指導し、失敗に對しては、「腹を切れ！」と突き放す

こともあり、木村忠吾と同様、回を追う毎に成長し、「あの莫迦息子も十何年もかかつて、ようやく剣術だけは物になりそうな……」と平蔵がにんまりするほどの腕前になり、時には平蔵の仕事を手助け、手柄を立てたりする。

組織の長として、後継者の育成は大きな任務である。平蔵は、これら簪にも棒にもかからない未熟な部下(子息・辰造も含め)を常に自分の視野に入れ、厳しい指導を加えつつも温かい眼で見守つてその成長を促している。

エ 上司からの信頼

まず、寛政改革を断行した松平定信である。彼は天明7年(1787)6月に老中首座となり、9月に長谷川平蔵を火付盗賊改方長官に任じ、更に寛政2年(1790)には周囲の反対を

押切つて長谷川平蔵に石川島人足寄場の運営法を上申させ、人足寄場取扱を兼任させ、以下のように存分に働かせている。平蔵は、2カ月の突貫工事である隅田川河口の埋立地である石川島に、2千6百余坪の人足寄場を完成させ、300人程の微罪の免囚たちを収容し、紙漉や大工などの技術を教え、炭団つくりなどで稼いだ金で人足たちの日常の生活費を賄い、残りは積み立てて社会復帰のおり、更正の元手として与えるように計らっている。

また、火付盗賊改方が直屬している老中に次ぐ重職の若年寄の京極備前守高久(元靖國神社宮司、京極高晴氏は、高久の直系である)は、兼ねてから平蔵を信頼すること厚く、何かというと幕府から「継子あつかい……」される盗賊改方を親身になつて庇護し「少ないが、御役目の足しにいたしてくれ」、こういつて手元金を平蔵に賜つたことも二度や三度ではなかつた(『鬼火』)。幕府関係のむずかしい探索の折にも「いかようにも助けてつかわす」という硬骨漢であつた。

このように上司に信頼されているということは、部下にとつても自分の仕事に認められることと同義であり、自分らの仕事にやりがいが増し、平蔵に對する信頼に反映するのである。

才 卓越した職務遂行能力

平蔵は、並々ならぬ剣術の使い手である。平蔵19歳のとき以来、本所（高杉銀平道場）で熱心に修業し、一刀流免許の腕を持っており、亡父からゆずられた粟田口国綱（2尺2寸9分）他十余振りの刀のほか多くの武器（脇差し、素手、石つぶて、手裏剣、小柄、十手、分銅縄、等々）をぞんぶんに駆使して闘っている。

このシリーズの中で平蔵が刃を交えるのはおよそ70回。うち少なくとも60回は無傷で敵を倒している。残りも引き分けたり、結局は勝っているので実質的な勝率は9割を大幅に上回っている。

捕り物の中心には必ず平蔵が位置して、適切な下知を加え、最も危険な場所には必ず平蔵がいる原動力は、この強さにあるのである。実力集団のトップとして剣の強さは必須のものであり、統率の基本であった。

カ 迅速な決断と果敢な行動力

たいていの場合、平蔵は遅疑逡巡しない。これはこの小説の全編にわたって流れている平蔵の行動様式である。

必要な情報の要求、容疑者に対する尾行、盗人宿等に対する監視、同心・密偵等との連絡等を瞬時に判断し、もつとも適切な配下をてきぱきと配置していく手際の良さは、胸のすく思い

がするほどである。

ましてその中に人としての人情が絡んでくると、そこまで考えているのかと感心することが多い。例えば、商家に押し入り、女房や娘を次々に凌辱し、金品を強奪する兇賊・葵小僧に対し、本来ならばきちんと調書をとって幕閣に報告しなければならぬ重大犯人なのに、平蔵は捕縛後、詳細に調べるともなく、すぐに打ち首にしてしまう。

上司から独断すぎると非難を受けるが、取調べることにより、関係女性の古傷を暴くことによるデメリットを考慮し、火付盗賊改方の特性を活かした迅速な処刑となったのである。

キ 優れた直感力

平蔵は、情報に対する反応、人の心の琴線の変化等に対して異常な直感力を発揮する。この小説の中では、『勤ばたらき』と表現されているが、平蔵の成長してきた環境、剣術修業の成果、

使命に対する責任感などの基盤の上に、あらゆる情報をすべて自分のもとに集約してものごとを判断し、変化の徴候を直感する。最も多くの情報が集まるトップのなせる技であるが、これが平蔵に対する信頼になるとともに、下記のような恐怖感にもなり得るのである。「草雲雀」における同心・細川峯太郎は、新婚の身でありながら、浮

気心を起こして女に会いに行く途中、

手配中の盗賊を見つけ、見張っていた。そこへ、報せによつて平蔵がかけつけたのだが、その時平蔵は、わざわざ細川の弁当も持つてきてくれる。その心配りに細川は空恐ろしさを感じる。弁当にまで思い至る平蔵なら、なぜ自分がこんな所にいるのかを、当然考えたに違いない、と思ったからであろう。自分の心と行動をすっかり見透かされている、という恐怖である。また、密偵・伊三次にも「……ああ、もう、この御方にはどうしてもかなわねえ。何も彼も、お見通しなのだ」と、言わせている。

このような直感力は、一朝一夕には養われるものではないが、豊富な識能と、物事に対する好奇心・探求心、あるいは仕事に対する責任感等から自ずと湧出するものではなからうか。

ク 運の強さ

強い平蔵も何度か死の危機に遭遇している。しかし、それを乗り越えたのは、単なる実力だけではなく、運の強さもあるように思える。「凄奴」では小犬が危機を救っているし、また、路地の黒猫が飛出す一瞬の間合いの空白に、抜刀して反撃を開始しているし、

更には絶対絶命の危機に陥った場合に、無二の親友である岸井左馬之助に

助けられている。運も実力のうちというが、良い統率者の一面には、運の強さも含まれるのかもしれない。

(3) 部下等に対する配慮・信頼

部下の与力・同心たちはおろか、密偵に対しても、平蔵は全幅の信頼を寄せているのだ。「この（信頼の）目が曇ったときこそ、俺は御役目を辞さねばならぬ」と心に秘め、「手下の者の全ての身になって、おつとめをするのでなくては頭領の値打ちなし」を実践する平蔵である。

密偵に成り立ての大滝の五郎蔵に不安を抱く部下が、五郎蔵には捕らえないと約束した盗賊を、「捕らえてしまおう」と進言したのに対して、平蔵は言う。「大和屋金兵衛に手は掛けぬと約束した俺の一言、これはな、酒井男の約束というものだ。相手が將軍家であろうとも、もと盗賊であろうとも、俺にとつては変わらぬことよ」と。

また、病気を押しして任務につかせ、危篤状態に陥った舟形の宗平（密偵）を、町人などには雲の上の人である、表御番医師（若年寄の支配に属する殿中医師）・井上立泉を呼んで治療させ、密偵たちに「あの御方の情の深さが、これほどとは思わなかった」としみじみ言わせる。

そして、町奉行の御用聞である富蔵

〔平蔵を尊敬し火付盜賊改の探索に協力的〕の一人息子の勾引かしに遭遇した平蔵は、盜賊改めの仕事とは無関係を承知しつつも「富蔵には、いつも助けてもらっているゆえ、今度は、できる限り、ちからになってつかわそう」と心に決め、全面的に探索を始めたり、女子供を助けようとして、狂刃に倒れた老盜賊の娘の嫁入り支度金を、素知らぬ顔で五郎蔵から与える、など枚挙にいとまがない。

また、文の表面にはでてこないが、筆頭与力の佐嶋忠介は無類の酒好きで、非番の時には1日で3升も空けてしまうほどである。長官・平蔵との夜分の調整は大体酒を飲みつつの打ち合せになることが多い。しかし、佐嶋は分を弁えて決して酔うほどは飲まない。平蔵もあえて勧めない。しかし、大捕り物が終わって一段落した時など、平蔵は「十分に飲んで休めよ」と声をかけることを忘れないし、佐嶋自身も猛暑の中、数日間に及ぶ連続の張込みから一時役宅に帰ってきた時に、平蔵の妻の久栄が、さりげなく、大振りの井に酒をなみなみと差し入れする等、まさに「あ・うん」の呼吸を思わせるのである。

このような、妻・久栄の行動の中にも平蔵の心配りが隠されているのを感じる。

(4) 部下との酒食を通じての対等な交わり

平蔵はかなりの酒好きである。見廻りの途中にちよっと一杯という場面がよくでてくる。また、役宅への密偵達の報告に際しても「御苦労であつた。まずは熱いのをひっかけろ。」から始まることが多い。

先出の出雲市長の岩國哲人氏も指摘するように、「いかに多くの機会を密偵や部下たちと酒を交しながら情報交換し、慰勞しているかである。酒の力で組織の隙間を埋め、酒が入って口もなめらかなった部下や密偵に心置きなく語らせる術をよく使っている。現代の日本の会社組織でも取入れられる風景である：酒はまた、平素は意識している身分や地位の差を薄めてくれる効果もあるようだ：（たとえ、もど盜賊の密偵であれ）感情の波長が合えば、「人並みに」話を聞いてもらえる」となる、言葉にならない表情や動作までがいきいきと情報を発信しだすから不思議である」と。

また、多くの「食」の場面がでてくる。池波正太郎氏は、「：たゞあれは一つの季節感を出すために書いている」と述べているが、それだけでなく、酒と同じように、部下・密偵とのコミュニケーションの一端でもあるのである。

。「食」を通じての食いしん坊の木村忠吾との会話を見ても、いかに両者がくつろいで本音で話をしているかが良くうかがえるのである。

おわりに
火付盜賊改方を統括する長官・長谷川平蔵は、常に死の危険性と隣り合わせにある任務に部下を投ずる。したがって自ら満身創痍になりながら第一線の先頭をきって走り、自分の全財産をお役目のために投出し、自分の信するところに向かつて突き進む。わずか百数十名の小さな組織であるが、抜群の統率により、それぞれの個性を発揮させつつ、常に一糸乱れぬ働きを見せる。

といつても、堅く恐ろしい、鬼だけの平蔵ではなく、仕事をしながら木村忠吾をからかい、密偵の彦十、茶店のあるじのお熊などは、若いころの鏡三郎に戻り、ぞんざいな口調で対応する等ユーモアのセンスにも溢れている。たかが歴史小説であるといえは、それまでであるが、この中には作者・池波正太郎氏の組織の統率者としての理想像が込められている。

指揮官と副指揮官の関係（平蔵と筆頭与力佐嶋）、指揮官と部下、部下相互の関係、家族のあり方、人としての生き方等々、多くのことを教えてくれる。これらの「人の心」については、歴

史・戦史書は事実という足かせによって、真理を追究し得ないし、統率者の理想像は叙述できないのである。ここに文学（歴史小説・歴史物）の存在価値があるのである。

【参考資料】

- 1 『鬼平犯科帳』 1-24巻 池波正太郎（文藝春秋）
- 2 『鬼平犯科帳の世界』 池波正太郎編（文藝春秋）
- 3 『池波正太郎・鬼兵料理帳』 佐藤隆介編（文藝春秋）
- 4 『鬼平犯科帳』 お愉しみ読本 文藝春秋社編（文藝春秋）
- 5 『鬼平』を極めるⅠ・Ⅱ フジテレビ編（扶桑社）
- 6 特集『池波正太郎を読む』 フレジデント 94・7月号 フレジデント社
- 7 『池波正太郎を読む』 常盤新平（潮出版社）
- 8 『鬼平対甚』 植草甚一（晶文社）
- 9 『長谷川平蔵・その生涯と人足寄場』 瀧川政次郎（中央公論社）